

大木久男作 「あこがれ — 裕子の場合」

母 裕子、手紙よ。ええと、鹿児島の北川さんから。

原島裕子 え、北川さん?!

(効果音) (手紙を開ける)

裕子 (読む)「原島さん。バプテスマ、おめでとう。本当によかった。今日の日が来るように、遠い鹿児島の空から祈っていました。(北川亨の声に)君が初めて僕に声をかけてくれたあの日、覚えてる? (FO)

ナレーション はらしまゆうこ原島裕子は、青春高校 1 年。今日、イエスさまを信じてバプテスマを受けたのです。手紙の主は北川とある亨。青春高校では裕子の 1 年先輩で、同じテニス部だったのですが、半年前に鹿児島に引っ越していったのです。裕子は、亨を通して信仰を持ったのですが、その陰には、こんなことがあったのです。8か月前のある日——。

(音楽) (ブリッジ。回想)

(効果音) (下校時のチャイム)

水野和子 裕子、今日はどうしたの?

裕子 ごめんね、和子。なんだかポーっとしちゃって。

和子 こっちはお陰様でヘットヘット。とばっちりもいいとこよ。裕子も、男子部の北川さん好きな分かるけど、何も練習中に素振りサボって、彼見てることないでしょう。裕子のこと、顧問の先生が注意してんのに、なかなか気づかないんだもん。先生、カンカンだったんだから。

裕子 (すまなそうに)だから謝ったじゃない。

和子 でも、競争率高いよ。北川さん好きな女の子、テニス部女子だけじゃなくて、北川さんと同じ 2 年生女子だっているんだからね。

裕子 がっかりするなー。そんなこと言わないで。でも、引かれちゃうのよねえ。まじめで、優しそうで、カッコいい。あれだけの人、ほかにはいないと思うな。

和子 まあそうね。わたしの趣味じゃないけれど、“まじめ”の上に“何か”がつくのよね。

裕子 ああいうまじめさがいいの。それにテニスやってるときの、一心にボールを追ってる彼が好き。ひたむきさとも言うのかな。

和子 (少しあきれて)そんなによけりゃ、アタックしてみたら?

裕子 いいの、遠くで見ているだけで。北川さんと同じテニスをやっていると思うだけで、わたしうれしいの。

ナレーション 裕子と話してるのは、親友の水野和子でした。次の日の昼休み、図書室の入り口で——。

(効果音) (人とぶつかってドスンとしりもちをつく音)

裕子 キャ!

北川亨 大丈夫かい?

裕子 ごめんなさい。うっかりしちゃって…。(亨と気づき)あ!

亨 本を読みながら歩いてちゃ危ないなあ。第一、前が見えないじゃない。

裕子 本当にどうもすみませんでした、北川さん。あっ…

亨 あれ、どうしておれの名前知ってるの?

裕子 あ、わたし、テニス部に入ってるんです。それに男子部はコートが隣で…。

亨 ああ、新入部員なんだ。女子部の顧問の先生、キビしいからなあ。練習キツイだろう。まあ、あの先生についてゆければ、うまくなれると思うから、頑張れよ。

あ、はいこれ。落とし物。

裕子 どうもすみません。

亨 「^{いのち}生命とは何か」。へえ、難しそうな本、読むんだなあ。

裕子 い、いえ。これ、生物の先生が勧めてくださった本なんです。

亨 ふうん。命…か。(間)君、“命”ってなんだと思う?

裕子 …“生きてる”ってことじゃ?

亨 うん。普通人間は、心臓や脳波なんかが止まったら、死ぬって考えるよね。もし、“永遠の命”があったら、って思ったことない?

裕子 永遠の、命…。

亨 そう、“永遠の命”。

(効果音) (午後の授業の始業チャイム)

亨 あ、いっけねえ。次は体育の授業なんだ。着替えなくちゃ。それじゃ。

裕子 失礼します。…あ、わたしも授業が始まってる!

(効果音) (授業中。先生の講義の声。)

裕子 (モノローグ)北川さんって、すてきだなあ。なんてあつたかい人。和子には、「遠くで見てるだけで」とか、「同じテニスをやっているだけで」なんて言っちゃったけど、いつもそばにいたい。自由にいろんなことを話してみたい。さっきみたいに命のことについてとか…。命? 永遠の命?

ナレーション その日の放課後、学校の帰り道。

和子 へー。昼休み、彼とそんなことあつたの? 裕子、チャンスじゃない。きっかけはあんまりよくなかったけど。よーし、希望がわいてきた。これからは裕子の出方次第よ。

裕子 まるで和子のことみたい。

和子 何頼りないこと言ってんのよオ。このチャンス、生かさなきゃ!

裕子 どんなふうにか?

和子 “どんなふうにか”って。こんなこと…。あ、裕子はまだだれとも付き合ったこ

となかったんだっけ。そうね、手始めは、北川さんと会ったときは、必ずあいさつをする。北川さんに裕子を“印象づける”のよ。それから、目であいさつができるようになれば、まずまずね。

裕子

それから？

和子

それからは、人それぞれね。裕子、いい？ 北川さんの目を見るのよ。よく恋愛小説に出てくるじゃない。「二人に言葉は要らない。その瞳^{ひとみ}のかすかな動きで、心が通じ合えたのだから…。」ってね。

裕子

和子の言うてんの、怪しいなあ。

和子

そっかなあ。こういうの、ダメ？

裕子

ダメ。目が今にも痛くなりそう。

ナレーション

それから幾日かたって、学校で――。

(効果音)

(教室のガヤ)

和子

ちょっと、ちょっと裕子。

裕子

なあに？

和子

それがさ、昨日の日曜日、駅前の本屋で立ち読みしてたの。昼ごろになって、おなかもすいたからうちへ帰ろうと思って、通りの反対側をふと見たら…。

裕子

どうしたの？

和子

いるのよ、北川さん。

裕子

え？

和子

ほら、駅前に、古い教会あるじゃん。その教会の建物から出てきたの。北川さんみたいなまじめな人はクリスチャンだっておかしくないでしょ。それで、出てきた人たちが、それぞれ別の方向に分かれてしまうと、北川さんともう一人の女の人が、一緒になって歩いていくじゃない。はっきりしたこと言えないけど、付き合ってる人じゃない？ 背がスラっとして、色白で、まあ美人の部類ね。それでね、わたし、二人がどこへ…。

裕子

(さえぎる)もう聞きたくない。わたし、先に帰る。

和子

部活やっていかないの、裕子？

裕子

(モノローグ) そうよね。北川さんみたいな人だったら、付き合ってる人ぐらいいるよね。それも、なんの取り柄もないわたしみたいじゃなくて、和子の言っていた“背のスラっとして、色白で美人”の、北川さんにお似合いの人が。どうして好きになったの？ あこがれのまんまでよかったのに。フラれちゃったあ。でもこのままじゃ、わたしイヤ。同じテニス部で、北川さんと顔合わすの耐えられない。テニス部、やめようかな。でも、やめるのはいつでもできるけど、北川さんの付き合ってる彼女、一度も見ないで、彼女かどうかははっきり分かりもしないで、黙って引き下がれない。そうよ、好きで好きでしょうがなかった北川さんじゃないの。…そうだ、一度その教会へ行行って確かめてこようっと。

ナレーション 次の日曜日、その教会の前まで行ってはみたものの、入る決心のつかない裕子でした。

裕子 (モノローグ) 教会の敷居って、どうしてこんなに高いのかしら。

亨 あれ、君、テニス部の…。

裕子 あ、北川さん。

亨 礼拝に？

祐 え？…ええ。

亨 どうぞどうぞ。

亨の姉 同じ学校のお友達？

亨 うん。

裕子 (モノローグ) あ、この人ね。背が高くて、色白で…。

亨 あ、君の名前聞いてなかったんだ。

裕子 は、原島裕子です。

亨の姉 亨の姉です。いらっしゃい、原島さん。いつも亨が。

裕子 初めまして。あの、本当にお姉さんなんですか？

亨 おれと違ってきれいでしょ。

亨の姉 まあ、何言ってんの、亨は。

裕子 本当にきれいです。モデルさんみたいです。

亨の姉 裕子さんまで。

亨 冗談はそれくらいにして、中に入ろうよ。礼拝始まるよ。

亨の姉 そうね。亨、裕子さん お願いね。

亨 任せなさい。

(音楽) (聖歌隊)

司会者 では、これで礼拝を終わります。

(効果音) (会衆のガヤ)

亨 どう、ご感想は？

裕子 感想って聞かれると、戸惑って何も言えなくなっちゃうんですけど。キリスト教を本当に信じてる人って、何か目的を持って、ひたむきに生きることができるんじゃないんですか？ 北川さんて、なんとなくそうじゃないかと思ってました。

亨 そう。原島さんの目に、ほんとに僕がそう映っていたとしたら、うれしいな。

裕子 わたし、北川さんにあこがれてたんです。いえ、単に同じテニス部だとか、カッコいいとか、そんなんじゃないなくて、北川さんて、何かこう、あったかくて、心の中にわたしの持っていないすばらしいものがあるような気がして…。

亨 そうだったの。わあ、感激だな、こりゃ。でも、そのすばらしいものって、何かなあ。

裕子 あのう、以前、北川さんが図書室のところで、わたしに“永遠の命”って言葉を

言っていましたよね？ わたしの持っていない、何かすばらしいものって、ひょっとしてその“永遠の命”のことですか？

亨 うーん、いい点突いてるね。今日、牧師さんの話した聖書の箇所、覚えてるかな。ええと、ヨハネの福音書の 17 章 3 節のイエス様の言われた言葉で、…

(効果音) (聖書をめくる音)

…「その永遠の命とは、唯一のまことの神であるあなた(父なる神)と、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです」ってあるだろ？ つまりさ、永遠の命ってのは…。(FO)

ナレーション こうして、裕子は教会に通うようになりました。それから 3 か月後、亨は父親の転勤で、遠く鹿児島に引っ越していきました。裕子は心の寂しさを覚えながらも、亨が教えてくれた、“永遠の命”を求め続け、半年後、こうしてイエス・キリストを信じてバプテスマを受けることができたのでした。

(音楽) (ブリッジ。回想終わり)

裕子 (モノローグ) 北川さん、あなたがいなくなってしばらくは、本当に寂しかった。ポツカリ心の中に穴が空いたようで。でもあなたは、イエス様を知らせてくれた。今わたしは、喜びでいっぱい。あなたへのあこがれは、遠くの空に消えてしまったけど、今わたしの心には、いつでも、どこにいても、イエス様がいてくれる。北川さん、ありがとう。

ナレーション 裕子は、あの温かい亨の横顔を思い出しながら、そっとつぶやいたのでした。
――。

<完>